
異なる世界の者が混ざった例

糖分

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異なる世界の者が混ざった例

【Nコード】

N8540I

【作者名】

糖分

【あらすじ】

「この作品同士が混ざり合ったらどうなるんだろう」と考えてみて書く事を決めました。原作改変をする場合があります。オリジナル命の方は読まない事をお勧めします。ノノ光 夏海は、たった1人の異形のターゲット『デイケイド』に大勢の人々が攻撃する夢を何でも見ていた。この話はその夢からはじまる。

参考作品参照（前書き）

このファンフィクションの物語に参加させた見た見た作品です。
どの作品がどのタイミングで参加するのは秘密です。
もしかしたら、増えたりするかも知れません。

参考作品参照

アルトネリコより

アルトネリコ 世界の終わりで詩い続ける少女（*1）

アルトネリコ2 世界に響く少女たちの創造詩

仮面ライダーシリーズより

仮面ライダーアギト

仮面ライダー555（*2）

仮面ライダー剣

仮面ライダーカブト

仮面ライダー電王（*2）

仮面ライダーディケイド（*2）

ゼノサーガシリーズより

ゼノサーガ エピソードII「善悪の彼岸」

ゼノサーガ エピソードIII「ツアラトウストラはかく語りき」

鉄拳シリーズより

鉄拳3

鉄拳6

NAMCO×CAPCOM

魔法少女リリカルなのはより

魔法少女リリカルなのは

魔法少女リリカルなのはA's

無限のフロンティアより

無限のフロンティア スーパーロボット大戦OGサーガ

ベヨネッタ

作者オリジナルキャラクター

(*1) は小説版含む

(*2) は劇場版作品も含む。

【デイケイド篇】プロローグ：異世界大戦

光 夏海は、夢を見た。一言で言えばその夢はとっても不思議な夢だった。自分は知らない荒野で倒れていた。上半身をだけ起こし周りを見渡した。木や草も何も生えていない荒野だった。

自分の服を見た。20歳なのに白を基調したフリルが付いた可愛いドレスを着ている。綺麗なままなら、案外可愛いと自分でも気に入るだろう。でも違う。

服には破れている場所が幾つかある。どこで汚してしまったのだろうか。酷い泥汚れがついている。そして、自分は何処で傷を負ったのだろうか。擦り傷があちらこちらにある。でも不思議に痛くなかった。そう夢だから。

「またこの夢ですか。」

彼女は初めて此処が、最近見ている夢なのだと気が付く。考えてみるがやっぱり訳が解からない夢である。そして、もうすぐ「あの時間」が始まる。

「キャッー!!」

行き成り爆発が起こった。突如何にもない荒野は、多くの人達が声を上げ戦場へ変わってしまった。大勢の異形や少女や大人が自分をすり抜けてターゲットへ向かっていく。空にはその人達の仲間だろうか、空を舞う電車や、龍のモンスター。リリカルな服装をした少女等達がターゲットへ向かう。他には、背中に黒い翼を生やした男性も居た。

その者達は、大勢でターゲットに一斉攻撃をして行く。此れでは数の勝負だ。夏海は、ターゲットが可愛そうになった。しかし、ターゲットはたった一人で、大勢を蹴散らしていく。まるで子供と大人の喧嘩を見ている様だ。ある者達には容赦なく剣を振り回し、ある者達には銃声と共に撃ち落とし倒していく。

ターゲットへ挑んでいった者達は、皆声を上げて倒れていく。そして、知らない内に自分の周りに死体の山が出来ている。異形の者の一体からは蒼火が出ていた。中にはその場に倒れこまず。ガラスのように砕けてしまった者もいる。

そして、そのターゲットが、自分に向かって歩いてくる。距離が遠くて解からなかったが、近づく事で見えてくる輪郭。マゼンダを基調とした異形の顔が…。彼女は知っている。彼の事を

「…ディケイド。」

その夢は何時も此処で終わる。そして、まぶたを開けば自然に涙を流している。

「なんで、この夢ばかり毎回見るのでしょうか。」

夏海が目覚めると自宅「光写真館」の受付が騒がしかった。理由はわかる。「あの」居候がまた何か知れかしたのだ。夏海はウンザリしながら、自宅の受付に向かう。

「…やれやれ。また彼ですか。」

夏海は、独り言を漏らしながら受付へのドアを開けた。自分が想

像した通りクレームを訴える客が自分の叔父に向かって怒鳴っていた。一応念の為に聞いておこうとして、来客への対応にアタフタしている。自分の叔父「光 栄次郎」に声をかける。

「お爺ちゃんどうかしましたか？」

「な、夏海。この人達が代金返せと…。」

「そうだ！カッコよくとってやると言ったから代金を弾んで、撮らせてやったのにつ！」

「そうよ！私も『世界一美女の様ににとってやる』って言われたから撮って貰ったのにこの有り様よ！！お金返しなさい！」

怒り来るって居る来客たちは次々と、彼が取った写真を付き出してくる。見ているとピンボケだ。見事にピンボケだ。此処までピンボケだと逆に清々しくなってくる。

「やっぱりまた彼ですか。」

首を落とし、大きな溜息を吐いた。

「そうだ。夏海！彼を呼んで来てくれないかい？お客様の前で、彼が謝ればお客様も機嫌が治るだろうし。」

「えっ！？私がつ！？」

「連れて行く必要はねえ！俺達が直接アイツに謝らせてやるっ！なっ！」

お客様が団結して「うおーっ！」と拳を挙げている。「ノリが良いお客だなあ。」と夏海はぼやきながら彼の行きそうな場所へ足を向ける。

数時間経過して夏海達は、ある公園で彼を見つけた。

「任せる。俺が世界一綺麗にお前を撮ってやるっ！いや、俺が取るからには宇宙一かなあ？」

どうやら、何時も首から下げている二眼レフのトイカメラで、1人の女性を撮ろうとしている最中らしい。このままでは、また彼の所為で疲れが貯まってしまうっ！そう考えた夏海は、彼の元へ駆け寄り、

「光家直伝！笑いのツボッ！！」

シャッターが押される前に親指で土のこめかみを押した。

「！？…アハ…。アハハハハハハハハハッ！…おいつ！何をするんだあっ！ナツミカン！」

こめかみを押された土が、突如馬鹿笑いをはじめた。土は笑いながら夏海を睨むが、笑っている所為で迫力がない。

「…これ以上、私の疲れを貯まらせない為の行動です。大体貴方は…。」

「し、知るかつ！だ、だいたいっ！この世界が俺に撮られたがつて居ないんだよ。…アハッ！ハハッ！」

「またそう言う事を！大体…！」

クレームを訴えた客達は、ぼかあゝんとその光景を見ていた。ただ馬鹿笑いしている土に向かって夏海はクドクド説教をしている。シユールな光景である。

馬鹿笑いしている彼の名は『門矢 土』。突然、夏海達の住む街

に現れ光写真館に居候しているが、それ以前の素性は不明で本人にも記憶が無い。夏海達の家の手伝いと称して写真は撮るがピンボケである。

なぜピンボケなのか、本人に聞くと『世界が俺に撮られたがつて居ない』と口にする。そして、夏海の生活を嫌な意味で忙しくした張本人である。夏海による笑いのツボによる効果が見えた。

「…申し訳ありませんでした。代金は返済します。ほら、土君も謝って！」

「すまなかつたな。」

「つ、土君っ！」

「お前なあっ！」

その態度を見かねた客の1人が土の胸ぐらを掴みかかろうとしたが、土は男の腕を交わしシャツターを下ろし続ける。数枚シャツターを降ろした後だ。

「デイケイド…。」

フレームに別の男が白いボロボロのセーターを着て逆さまに立っている。良く見ると傷を受けて、血も出している。おまけに青アザまで作っている始末だ。土は見間違いではないのかと、カメラから視線を離し何度もレンズを覗く。夏海はそんな土の行動を見て首をかしげる。

「…？」

「土君？」

それでも殴り掛かろうとした男は諦めず、土を捕まえようとする

が、土は彼の腕を交わしてレンズを覗く。しかしやはりフレームにはその男では、ボロボロの知らない男が逆さまに立っている。

「…ディケイド。今日、貴方の世界が終わります。」

そして、彼にとんでも無いことを口にした。

【ディケイド篇】プロローグ：異世界大戦（後書き）

「貴方のライトブッカーとディケイドドライバー、カードは何処ですか？」

「クレジットカードは作らない主義だ。」

「ひっ、人が塩の柱にっ！」

「何だよこいつ等。ウネウネして気持ち悪い」

次回【ディケイド篇】第1話：混ざり合っつて崩壊する世界で

【デイケイド篇】第1話：混ざり合って崩壊する世界で

士は公園で、自分に向かって殴りかかってきた相手の拳を避けながら、その相手にレンズを向けていた。しか、そのレンズの向こう側では、全く別の世界の夜景が広がっていた。そして、逆さまに見知らぬ青年が蝙蝠の様に立っていた。

「…デイケイド。今日、貴方の世界が終わります。」

この男は開口一番にそんな事を口にした。自分の世界が終わると言うのだ。しかも自分のカメラのフレームにしか居ない。疲れているのか？とフレームから目を逸らし、もう一度フレームを覗く。やっぱり存在している。

「なんだ？…こいつ。」

士が混乱している間に突然地震が起こり始めた。

「きゃっ！…まっ、また地震ですかっ！」

夏海がバランスを崩し、その場に座り込んでしまう。それと同様に土に文句を言いに来たお客も、その場に倒れこんだり、バランスを崩し中腰になってしまっている。

「なんだ！なんだ！今度の地震はでかいなっ！」

そう『この世界の住人』によれば、「また地震」なのだ。土達の居る世界では、この様な地震が度々発生していた。だが地震とも言うっても少しゆれる程度であり、大災害に発展する程でも無い。しか

し、インターネットのオカルト関係の掲示板や、人々の噂で地球規模の大災害に見舞われると噂されていた。

数時間後…。

「…ほんとすいませんでした。」

夏海が、無理やり士の頭を下げながら、クレームをつけたお客達に向かって頭を下げた。問題を起こした士は不機嫌な表情だったが。

…しばらくして写真館への帰り道。日は暮れていて、多くの人達がそれぞれの家路へ向かっている尾踊りで。

「いい加減にしるナツミカン」

士は自分が乗っている大型バイクを引きながら、夏海をジト目で見ている。そんな士に向かい『まだ懲りてないのか』と自分の親指を士へ向ける夏海。士は思わず身を引いてしまう。また夏海の怒りが爆発した。

「何がいい加減にしるですか？、だいたいこれ以上、私の家を君の代理店代わりにされては困ります。立て替えたフィルム代含めて

…。

「ああ。大体解かった。」

そんな夏海の説教をしれつとした態度で聞き流しながら、また懲りずに士はフレーム越しでこの世界を覗いていた。

「…大体って。これ以上、歪んだ写真をとってどうするんですか？」

夏海は呆れて溜息を吐き、土に問いただした。

「別に好きで歪んだ写真を撮っているんじゃない…。」

土は、夏海の方へ顔を向けず、ただカメラのフレームを通して世界を見ながら

「世界が…。」

レンズの度をあわせて、シャッターを押す。

「俺に撮られたがってないんだ。」

「…世界？…此処は貴方の世界ではないと言つのですか？」

シャッター音と共に口に出した土の言葉に、夏海は首をかしげ

「そう、此処は『俺に撮られる刺客が無い世界』だ。町も。人も。俺を避けていく…。」

「…？」

土は、夏海の方へ顔を向け

「早く帰ろうぜ？今日の地震は大きかった」

自分の大型バイクに乗るように、顎を動かした時だ。大きな地震が起きた。

「…し？」「

士が周りを見渡すとビルが一瞬として砕け散った。まるで元から無かったように…。そして、そのビルがあった場所からエイの様な大型モンスターが士達目掛けて飛来してくる。

「危ないっ！」

士は、夏海を突き飛ばした。

「きゃっっ！」

突き飛ばした瞬間、士と夏海を隔てるように揺らぎの壁が発生した。

「つつ、士君！後ろっ！後ろっ！」

夏海の声に士は後ろを振り返った。ウネウネした半透明なモンスターが人々を襲っている。次第に悲鳴が聞こえ。吹き飛ばされている人々もいる。抵抗しようとしてモンスターを殴りつけている人も居るが、そのモンスターに掴まれたとたん。体が白くなって行き、弾け飛んでしまった者も居る。

「ひっ、人が塩の柱にっ！」

中には苦痛な表情を浮かべながらそのモンスターに変貌してしまつた者もいる。

「なんだよ。ウネウネして気持ちいい。！？」

「士君！逃げてください！士君！！」

夏海は揺らぎの壁に向かって何度も自分の拳を叩いていた。割れ

ない。まるで、防弾ガラスのようだ。

「なんなの！？これっ！」

次第にそのモンスターの腕が土に迫るその時だった。

「つかさ…君？」

夏海の目の前から土が消えてしまった。見えなくなってしまったのだ。今度は自分の方から逃げ惑う人々の声が聞こえる。今度は自分の番になった。

「…？ここは？」

土は周りを見渡した。突然景色が揺らいだと思ったら今度は、自分のバイクと共にビルの屋上だ。不思議な事に、まだそんな時間では無いのに空には満月が浮かんでいる。

「お久しぶりです…。デイケイド。」

「お前…。誰だ？」

自分の方へ向かって、先程のフレームの中の住人が近づいて来た。フレームで顔しか見えなかったが、その住人は、セーターと首にマフラーを巻いている。

「言っただろ？渡。まだ、この時点じゃまだ。俺達と会ってないから警戒されるって…。」

なんか、小さい蝙蝠らしき物体が、渡と呼ばれる青年の周りに飛んでいる。

「そうだったね…。」

渡と呼ばれた青年は悲しそうに、自分の手の甲をその蝙蝠の止まり木させる為に掲げる。

「マシンドレイカーはありますね。…貴方のライトブッカーとデイクイドライバー。そして、カードは何処です？」

「…クレジットカードは作らない主義だ。」

噛み合わない会話が終了した後で、土の景色は別の場所が変わっていく。

「…。」

しばらく唾然として、自分の置かれた表情を整理していた。そして、思い出したように。

「そうだ。…夏海。…夏海っ！」

夏海の名を呼びながら、彼女を探して慌てて自分のバイクを走らせた。

一方夏海は、自分を殺しに来るモンスターから逃げ惑っていた。しかし逃げ惑う人々の肩にぶつかりその場に倒れてしまう。

「あっ！」

自分の目の前にモンスターの触手が迫ってくる。たしか、その触手が自分の口や鼻の穴へ入ると、灰とがして死んでしまう筈だ。自

分も死ぬのかと考え目蓋を閉じた時。

「お前の望みを言ええ〜。」

自分の周りの景色が変わっていた。今度は灰色のモンスターが自分に望みを言えと群がってくる。胴体から上が地面から生えていて、胴体から下が空から映えている。

「いやあああああつ！」

どうやら、今度のモンスターは自分でも簡単に倒せるらしい。粉砕しながら逃げる事にした。また、世界が揺らいた。もうこうなると小旅行だ。今度は廃墟が広がっていた。どうやら、モンスターも人も居ない場所へ移動した様だ。しかし、彼女の受難は続くどうやら運勢が悪いらしい。大きな地震が起こった。

「きゃっっ！」

地震が廃墟が崩れ、その崩れた場所から、見覚えがある物が出てきた。

「…これはっ！」

夏海は、そのベルトと武器を手にとって、確認する。確かに汚れているが、夢の中で総攻撃を受けていた異形がつけていたベルトと武器である。

「夏海っ！おい夏海っ！」

自分の名を呼ぶ声がする。その声の主の方へ視線を向けると土が、

揺らぎの壁の向こう側で、必死に拳を壁に向かって殴りつけ壁を破壊しようとしている。

「…土君。無事だったんですね？」

夏海は壁へ駆け寄り、安心するが…。

「夏海？おいっ！夏海っ！！」

…土君が自分に向かって、必死に訴えている。夏海が首をかしげた後、後ろを振り向くと、もう1人の自分が立っていた。もう1人の自分は驚く暇も与えては暮れず。蛹の様なモンスターに変貌して、更に虫が成虫になる様にスラットした中身を披露した。

「!?!」

すると、その虫の様なモンスターと類似した姿のモンスターが自分に沸いてきて、自分に向かってジリジリと迫ってくる。そんな夏海は、揺らぎの壁に背を向け寄りかかり、涙で瞳を潤ませて。顔面蒼白になっていた。

「夏海っ！夏海っ！」

土は、何とかして夏海を助けようと、自分の拳で何度も、何度も、何度も、揺らぎの壁を打つが、現実には残酷で割れる気配は全く無い…。

「くそっ！こんなものなのかつ！」

もう一度、壁を拳で壁を打ち

「世界の終わりって…。」

奥歯をかみ締め、おびえる夏海の背を見た。すると夏海が不思議なベルトと本のような武器だろうか？なんか良く解からない物を持っている。

「…貴方のライトブッカーとデイケイドライバー。そして、カードは何処です？」

「まさか。夏海その手に持っているものを俺に渡せっ！」

「…土君？でも…。」

どつやって？と夏海が言おうとした時。

「世界を救ってやる。…たぶん。」

土は自身に満ち溢れた表情で、でも曖昧な回答を夏海にした。その表情に夏海は何故か、信用できると考え。藁にも掴む思いで自分のベルトと武器を歪みの壁へ突っ込んだ。

「…。え？」

すると、そのベルトと武器は、自分の居るこちら側では薄汚れていた筈なのに、土のいる壁の向こう側にはまるで新品のようになっていた。そして、ベルトはバックルに変化していた。

「きゃあああっ！」

夏海は、モンスターに引っ張られ、離れてれてしまったが、自分

が欲しかった物は土の手へ届いた。土はまるで使用法を知っているかの様に腰にバックルを当てる。バックルを中心にベルトが構成された。バックル両側のサイドハンドルを外側に引くことで、バックルが90度回転してカード挿入口が上部に露出した。そこに土がカードをライトブッカーから取り出しカードを装填する。

「変身っ！」

すると、そのカードの種類が発声されて待機音が鳴る。

『KAMEN RIDE』

同時にカードの裏面に描かれたライダーの紋章が投影されて

『DECADE』

夏海は、土の方へ視線を向けたすると、土は謎の紋章と複数の異形のシルエットが重なるそして、10枚の長方形が歪みの壁を壊し、その破片は夏海を襲っていたモンスター目掛けて飛んでいく。土の顔を目掛けて飛んでいく。そして土は彼女の夢の中に存在したターゲットに変身した。

「デイケイド」

「…お前なんでその名を知っているんだよ。」

土は何故、夏海がその事を知っているのか首をかしげながら、自分の腰につけていた本の様な武器『ライドブッカー』をソードモードへと変形させて残りのモンスターを倒すため更に変身する。

『KAMEN RIDE』

KABUTOと書かれた異形が描かれているカードをディケイドドライバーに呼び込ませる。

『KABUTO』

するとディケイドが鋼をまとい他の異形へ変身した。

『ATTACK RIDE CLOCK UP』

夏海はディケイドがカードを読み込ませた姿を見たと思ったが、ディケイドの居た周りでは爆発が起こり、彼と戦っていたはずのモンスターも居なくなっていた。

「いくぞ…。」

ディケイドは自分の武器の刃を掌でなぞっていた。バックルからカードが飛び出し、元のディケイドの姿に戻っていた。ディケイドは、夏海を乗せて自宅へ戻ろうとマシンディケイダーを走らせる。

「…なんで俺、あの時あのカードを選んだんだ。」

「きやつ!」

ディケイドが考え事をしながら、マシンディケイダーを走らせている途中。夏海が行き成り触手に巻き取られて奪われてしまった!

「くっ」

ディケイドは再びカードを選び変身する。目の前では白い動物の

骨を象ったモンスターに夏海が襲われている。

『KAMEN RIDE』

デイクイドの体に紅い線が流れそれを元にまた、別の異形へ変身する。

『FAIZ』

デイクイドは、まるで覚えているかのように再びカードを取り出し

『ATTACK RIDE AUTO VAJIN』

マシンデイクイダーは別のマシンに姿を変え、更に人型に変形し夏海の元を目指しながら彼女を襲うモンスターを蹴散らしていく。

「隠れているっ！夏みかんっ！」

変身したマシンデイクイダーと共に、夏海の元へデイクイドは移動してそして、マシンデイクイダーのグリップを抜き取り。一体一体、確実にモンスターを切り倒していく。すると、モンスターはギリシヤ文字の『ファイ』の文字を上げながら青い炎をまとって死んでいく。さらに、今度は別の大きささまざまなモンスター同士が遠方の方で戦っていた。

『KAMEN RIDE HIBIKI』

デイクイドは青い火炎を纏いまた別の異形に変身した。

『ATTACK RIDE ONGEKIBOU REKKA』

ディケイドの背中にバチの様な武器が現れ、ディケイドは火炎弾をそのモンスター達に打ち込んで倒していく。

「何故だ？…俺は戦い方を知っている。それに…どう言うことだ？力が失われていく。変身しても力が長く続かない…。」

「それはかつて君がすべてを失ったからだ…。」

何時の間にか自分達の家である写真館前に居た。そして、その写真館の前に先程の渡と呼ばれた青年が待っていた。

「…。どう言う事だ。渡。」

「土君？…誰と話しているんですか？」

「どうやら、渡と呼ばれる青年は自分にしか見えならしい。」

「貴方は世界を救えます。…凄い光景ですね。」

「？」

いつの間にか自分達の周りの景色が、無数の地球に埋め尽くされていた。

「きゃっ！」

夏海が声を上げる。

「…地球。なのか？」

「ええ。今、様々なパラレルワールドが1つになるつとじています。本来なら絶対交じり合う事が無い世界です。」

渡は、無数の地球を眺めながら、淡々と言葉を繋いでいる。

「ある世界では、宇宙が散逸しつつあり。ある世界では、1人の魔女が天使と戦いを繰り広げ、魔道士が時空を超え戦う世界。また他の世界では、1人の男性が全てを終わらせようと全ての人類を敵にまわす等、世界は無数に広がっています。どれもこれも交じり合う事が無い物語です。ですが、その物語が今、交じり合おうとしています。」

渡が視線を土へ向け、真面目な表情で落ち着いて話す。

「貴方はそれらの世界を旅する必要があります…。それが世界を救うたった一つの方法です。」

「そこで、何で俺なんだ。」

土は首を傾げ、険しい表情で渡を見つめる。渡は苦笑しながらそつと口を開く

「貴方は破壊者です。それに『想像』は、『破壊』からしか生まれない…。残念ですが。」

渡が指を鳴らすと、土達の周りの光景は写真館に変わり始めた。

「貴方が旅を終えるまで、僕と僕の仲間たちが世界をこのままの状態にしておきましょう。それでは、良い旅を。」

「とまっている…。」

土と夏海達以外の事象が止まっていた。写真館の中へ入り土は、夏海に渡との会話を話した。

「つまり…。貴方が世界を巡れば世界は救われるんですね。」
「なんだかそう言うことらしいぜ。無限に広がる世界か。撮ってみるか…。」

士はどこかやる気がなさそうに、カメラのシャッターを切った。

「よしっ！行きましょう！」

「なんで、お前までくるんだよ。」

夏海の声に士が愚痴る。しかもかなり嫌そうにつな垂れる。

「士君。当てになりませんしそれに…。それに…。」

夏海には確認したい事があった。自分が見たくも無いのに見させられる夢について、もし彼女がみている夢が現実になるのなら彼が世界を滅ぼすのだ。

「それに？」

「それに、この機会に借金を踏み倒されては困りますっ！で、どうやって他の世界に行くんですか？」

「知らない。」

「はい？」

あまりにも予定外の回答に夏海は、きょとんとした。

「知らないって、ホントは忘れたんでしょ？」

「違う。ホントに知らないんだ。あいつ…。」

怒る夏海に士はバツが悪そうに片手で頭を抱える。

「人はね…。誰も旅人なんだよ。」

二人の争いを微笑ましく見ている栄次郎が、垂れ幕を変えた。

「……!?」「」

すると見た事も無い垂れ幕が垂れ下がっていた。パトカーが橋を掛かっている道を走っている様子が描かれている垂れ幕だ。そして今は、夕方だった筈なのに外は朝になっていた。土は外に出た。すると土の姿が警官に代わった。そして、自分のトランシーバーから通信が入る。

『近隣住民の避難完了。警官は神経断裂弾を使用して、グロンギ非B群の排除をされたし』

とある一台のパトカーの中では、女刑事がトランシーバーの送信元へむかってメッセージを送る。

「ユウスケ。近隣住民の避難は完了したわ。『金の力』思う存分使いなさい。」

バイク『ビートチエイサー2000』は、青年『小野寺ユウスケ』を乗せて目的地へ移動する。

「ああ解かったよ！姐さん！」

（あのグロンギと再び戦う事になるなら、またあの女の子が来るはずだ。あの悲しい瞳の子が。）

そのビートチエイサー2000を1人の少女が空から、浮んで見

つめている。

「いくのかい？フェイト？」

大きい狼の様な生物が、少女へ向かって確認する。フェイトと呼ばれる少女が頷き。

「…行こう。アルフ。母さんが待ってる。」

再び、写真館に場所は戻る。土は確信した。この世界が何の世界なのかと。

「『クウガの世界』か。」

【ディケイド篇】第1話：混ざり合っつて崩壊する世界で（後書き）

「ロストロギア『ジュエルシード』貰います。」

「貴方が悪魔ですね。」

「話は聞いているぞっ！悪魔ああっ！」

「相棒…。この世界にもライダーが居るぜ。」

「そっだね。兄貴。」

次回【ディケイド篇】第2話：宝石

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8540i/>

異なる世界の者が混ざった例

2010年10月15日21時23分発行